

日本文学科 現3年生

令和5年度開講「演習」仮シラバス

【日本文学演習】

※曜日・時限は予定ですので、変更になる場合があります。

科目名		担当者	曜日	時限	ページ
上 代	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	土佐 秀里	木	5	4
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	谷口 雅博	木	5	5
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	上野 誠	火	3	5
中 古	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	太田 敦子	木	4	6
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	塚原 明弘	木	6	6
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	竹内 正彦	金	6	7
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	津島 知明	月	3	7
中 世	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	荒木 優也	火	4	8
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	荒木 優也	木	6	8
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	野中 哲照	火	6	9
近 世	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	岩崎 雅彦	火	6	10
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	中村 正明	火	3	10
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	中村 正明	木	6	11
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	藤川 雅恵	未定	未定	11
近 代	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ (★)	石川 則夫	月	3	12
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ (★)	井上 明芳	金	6	12
近 現 代	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	井上 明芳	金	5	13
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	鬼頭 七美	月	2	13
	日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	岡崎 直也	月	4	14

※★印の科目は、原則として卒業論文履修者が履修することができる。

【上代文学】

【科目名】 日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】 木曜
【時限】 5限	
【教員名】 土佐 秀里	
【テーマ】 万葉集の物語性と歴史性	
<p>(演習内容)</p> <p>この演習は『万葉集』を研究するものですが、日本文学演習Ⅰの古典分野(上代・中古・中世・近世)を履修していることが前提になっています。また編入生の場合は、短大等で万葉集または上代文学に関する演習・講義を履修していることを必須とします。毎年途中で脱落する編入生が多いので、この点は特に注意してください。この演習Ⅱは、日本文学科の3年生として当然備えているべき文学史的知識と古典文法の知識が、十分に備わっていることを前提に開講しています。その前提が欠けている人は、まずは「演習Ⅰ」を履修してから、この演習Ⅱに進んでいただきたいと思います。</p> <p>この演習の大きなテーマは、①万葉集の歌を、物語を読むようにして読む、②万葉集の歌の歴史的背景を考えて読む、というものですが、演習発表そのものは、それぞれの発表者が個別に具体的なテーマを設定し、それに見合った具体的な作品を精読してゆくことになります。個別のテーマ設定と作品選択についてはいくらかでもアドバイスしますが、「作品を読む」という要素がないものは発表として認められません。また、その読み方が既存の注釈書等に頼っただけの「浅い」ものであれば、評価はできません。最初の授業でこの演習の方針を示しますので、その趣旨を十分に理解して発表を行ってください。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>①最初の授業に出席し、演習の趣旨を理解していること。②日本文学科3年として持っていないとまらない文法知識や文学史知識が備わっていること。③概説や理論ではなく、具体的な作品を考察の対象とし、その分析を行っていること。④発表資料の密度と分量が一定以上であること。内容のない水増しはマイナス評価となる。⑤他人の受け売りではない、自分なりの着眼点や考え方が示されていること。⑥質疑応答に対し、その場で考え、答えること。⑦「文学」であることの意味と、その面白さについて十分に考えていること。以上の七項目の観点から、発表資料・発表内容・質疑応答を総合的に評価する。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】木曜
	【時限】5限
【教員名】谷口 雅博	
【テーマ】上代の神話・説話を読む	
<p>(演習内容)</p> <p>『古事記』(中・下巻)、「風土記」等に記載された神話・説話を対象とし、学生の発表を中心に据えて授業を行う。本文の的確な読みを検討した上で、古代的な論理・信仰・習俗などの背景について考えつつ、新たな読みを模索していく。</p> <p>上代の文献には本文・訓読に問題のある箇所が多く、また解釈も定まっていない話が多い。まずは本文批判を徹底し、その上で各神話・説話の検討を行う必要がある。従って、本文などを確定する一回目と、内容を検討する二回目とに分けて発表を義務付けることになる。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>発表資料・発表内容・質疑応答 50%</p> <p>学年末レポート 50%</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】火曜
	【時限】3限
【教員名】上野 誠	
【テーマ】『万葉集』の風土論的研究	
<p>(演習内容)</p> <p>『万葉集』の歌々の表現が、風土とどのように結びついているのか、結びついていないのか、具体的に考えてゆきます。明日香とはどんなところなのか、平城京は都としてどのように表現されているのか、吉野の離宮はどういう構造を持っていたのか。そういった諸問題を具体的に考えてゆきます。いわば万葉小旅行のようなかたちをとりながら、風土と文学の関係を考える授業となるはずです。歴史学、考古学、民俗学などの知識を動員して考察を進めてゆきます。本年度は、巻6、7、8、9を中心にします。卒業論文を提出する人は、できるだけこの演習を履修するようにしてください。必ずプラスになるはずです。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>授業での取り組みを重視し、発表も加味して評価をします。学習への取り組みも大切なのですが、学習を楽しむ心が必要だと私は考えています。</p> <p>研究小レポート 50%、授業での取り組み(質疑応答、参画、授業時提出物) 50%</p>	

【中古文学】

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】木曜
	【時限】4限
【教員名】太田 敦子	
【テーマ】『源氏物語』「若菜下」巻を読む	
<p>(演習内容)</p> <p>『源氏物語』「若菜下」巻の輪読を行い、研究方法の修得と作品の理解を目指します。発表担当者は、担当する場面の諸注釈整理・鑑賞・考察に基づいた現代語訳を発表し、質疑応答に臨みます。『源氏物語』第二部世界の読解には、第一部・第三部世界の理解が欠かせないため、物語全体を意識しながら第二部世界「若菜下」巻を輪読します。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>口頭発表 (60%)、口頭発表に基づくレポート (20%)、積極的な授業への参加態度 (20%)</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】木曜
	【時限】6限
【教員名】塚原 明弘	
【テーマ】『源氏物語』のことばと歴史的背景	
<p>(演習内容)</p> <p>受講者の発表と教員の講評により、『源氏物語』を読み進めていく。1人、年2回程度の発表を課す予定。求める内容は、音読・現代語訳・諸注による解釈の問題点・研究鑑賞。自分で感じ、考え、調べたことを出発点にして、作品を深く味わい、洞察する力を身につけたい。今年の対象は、「少女」巻後半から「玉鬘」巻前半。夕霧と雲居雁の恋、五節の舞姫、朱雀院行幸、六条院造宮、春秋くらべ。玉鬘の消息、大宰府、大夫監、上京、初瀬詣で。物語は新たな段階を迎える。歴史知識や言語感覚が理解を確実にする。本文の表現に立脚しつつ、歴史や民俗に配慮することによって、読みを深めて行く。</p> <p>ここでの分析や議論によって、受講者の読みを鍛え、問題意識や独自の視点を醸成する。レポートや卒業論文だけでなく、世界の見方につながる。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>出席 30%・発表 35%・年末のレポート 35%による。年末のレポートは、発表で扱った内容を発展させてまとめるのが希望。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】金曜
	【時限】6限
【教員名】竹内 正彦	
【テーマ】『源氏物語』「賢木」巻を読む	
<p>(演習内容)</p> <p>『源氏物語』「賢木」巻を対象として輪読を行う。発表担当者が担当範囲について、諸本の異同、諸注釈、現代語訳、調査・研究といった項目にわたって資料を使いながら発表し、その後、受講者相互の討議を行うことによって、『源氏物語』を読み深めるとともにその研究方法を学んでいく。口頭発表は各学期にそれぞれ1回を予定。各学期末にはレポートを課す。『源氏物語』は、調べれば調べるほど、奥深い世界を見せてくれる。受講生の積極的な取り組みが期待される。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>発表資料・発表内容60% レポート20% 授業への取り組み状況20%</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】月曜
	【時限】3限
【教員名】津島 知明	
【テーマ】『枕草子』を読み味わう	
<p>(演習内容)</p> <p>『枕草子』の様々な章段を読みながら、その魅力を味わっていきます。担当範囲を割り当て、調べてきた結果を口頭発表してもらいます。質疑応答を経て、さらに各自で問題点を深めてもらいます。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>平常点100%</p> <p>発表内容およびコメントの提出状況で評価します。</p>	

【中世文学】

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】火曜
	【時限】4限
【教員名】荒木 優也	
【テーマ】『古今和歌集』『新古今和歌集』を読む	
<p>(演習内容)</p> <p>本演習では、ⅡA・ⅢA(前期)において『古今和歌集』、ⅡB・ⅢB(後期)において『新古今和歌集』を対象とした発表を行うことで、古典和歌の理解、研究方法の獲得をめざす。履修者は、前期・後期にそれぞれ指定される和歌を必ず担当し、『新編国歌大観』を用いながら歌語の解釈、歌の考察を行う。そして、前期・後期の学期末にそれら発表をまとめ直したレポートを提出することを義務とする。</p> <p>教科書は、小町谷照彦 訳注『古今和歌集』(ちくま学芸文庫)を用いる予定である。</p> <p>また、和歌を研究するには多くの知識が必要となるため、「日本時代文学史Ⅰ」(木5 荒木担当)の受講もお願いしたい。</p> <p>なお、卒業論文で荒木を指導教員に選ぶ可能性がある者は、履修することが望ましい。</p>	
(評価方法)	
発表資料・発表内容 50% 授業参加(質疑応答) 20% 学年末レポート 30%	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】木曜
	【時限】6限
【教員名】荒木 優也	
【テーマ】『百人一首』を古注釈で読む	
<p>(演習内容)</p> <p>『百人一首』は、藤原定家の撰とされてきたが、昨今の研究においては否定されている。ただし、定家撰でなくとも日本文化に及ぼした影響が大きいことに変わりはない。</p> <p>履修者は、前期・後期にそれぞれ指定される『百人一首』の和歌を必ず担当し、古注釈の比較検討、歌語の解釈、考察を行う。そして、前期・後期の学期末にそれら発表をまとめ直したレポートを提出することを義務とする。</p> <p>教科書は、『百人一首古注抄』(和泉書院)を用いる予定である。</p> <p>また、和歌を研究するには多くの知識が必要となるため、「日本時代文学史Ⅰ」(木5 荒木担当)の受講もお願いしたい。</p> <p>なお、卒業論文で荒木を指導教員に選ぶ可能性がある者は、履修することが望ましい。</p>	
(評価方法)	
発表資料・発表内容 50% 授業参加(質疑応答) 20% 学年末レポート 30%	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】火曜
	【時限】6限
【教員名】野中 哲照	
【テーマ】中世散文の研究	
<p>(演習内容)</p> <p>中世散文の領域で、学生各自がテーマを持ち、それについてとことん調べ、読みこんで深く掘り下げて、研究発表をします。説話の人、軍記の人、日記・紀行の人、随筆の人など。作品ではなく、古典世界の文化論、時代社会論でも構いません。中学校・高校の頃、「押し付けられる勉強ではなく、自分の好きなことを研究したい」と思っていませんでしたか？ 今こそ、それを実現しましょう。ここでの発表に、決まった「型」もありません。</p> <p>卒論履修の人はその中間報告をしても構いませんし、卒論の研究余滴（脱線編、スピノフ）でもよいです。非履修の人（新4年生）は中世散文の中から自由にテーマを選び、いわゆる「学術的な方法、にこだわらず、説得力だけをめざして研究発表してみてください。この授業で目指すのは、学生の主体性と問題解決能力の獲得です。そのために、押し付けられたものではなく、自分の問題意識に沿って何かを深めてみましょう。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>平常点（出席点、授業時のレポートや研究発表） 定期試験は行わない。</p>	

【近世文学】

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】火曜
	【時限】6限
【教員名】岩崎 雅彦	
【テーマ】浄瑠璃の研究	
<p>(演習内容)</p> <p>浄瑠璃の作品『田村麿鈴鹿合戦』を扱う。浄瑠璃は近世に新しく生まれた語り物で、三味線の演奏とともに語られた。</p> <p>『田村麿鈴鹿合戦』は、坂上田村麿（さかのうえのたむらまろ）の鬼神退治を題材とする物語で、室町時代の御伽草子『田村の草子』などをもとに、新たに創作を加えて作られた作品である。</p> <p>授業は個人発表の形で、本文の注釈と現代語訳および考察を行う。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>各回の発表の内容、および期末レポートで評価する。欠席は原則として認めない。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】火曜
	【時限】3限
【教員名】中村 正明	
【テーマ】黄表紙を読み解く ―江戸の庶民文化と文学―	
<p>(演習内容)</p> <p>黄表紙は、江戸時代中期に始まる草双紙の一時期（安永～文化期）を指す呼称で、滑稽と奇趣、うがちと通人性に満ちた絵入り読み物である。絵が大きく描かれ、その余白に文章が書き込まれるという特異な性質を持った文学ジャンルであり、江戸庶民に広く受け入れられた。そのため、黄表紙には当時の人びとの生活・風俗・文化がいきいきと描き出されている。本演習では、そうした多種多様な江戸の時代層を読解し自ら調査・発表することを第一義とする。また、それだけでなく、近世文学独特の表現を把握・考察することにも重点を置きたい。そのことが黄表紙の理解のみならず、深く江戸時代の文学全体の理解へと繋がることにもなるだろう。</p> <p>黄表紙の代表的な作品数種（『金々先生栄花夢』『無題記』など）を扱う予定。</p> <p>近世文学で卒業論文を執筆する学生、執筆しようと考えている学生は、特に本演習を履修するようにして下さい。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>演習発表 60%、授業参加（質疑応答） 30%、レポート 10%。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】木曜
	【時限】6限
【教員名】中村 正明	
【テーマ】明治初期文学を読み解く ―仮名垣魯文と新聞小説―	
(演習内容)	
<p>本演習で扱う明治初期というのは、明治初年代から十年代を指しており、近代文学成立期に当たる。近世文学から近代文学へと移行する端境期に当たるこの時期の文学は、政治の鳴動と社会・文化の変化を直接的に反映するものが多いと言えよう。</p> <p>本演習では、江戸・明治の両時代に跨って活躍した戯作者であり、新時代のジャーナリストである仮名垣魯文の作品を扱う。特に魯文が主幹であった小新聞『かなよみ』の雑報記事をもとに文芸化された『高橋阿伝夜刃譚(たかはしおでんやしやものがたり)』(明治十二年刊)を読むことにしたい。本作は、実際の事件として話題となった、毒婦と呼ばれた女性高橋お伝による殺人事件を題材とした実録小説である。そこに見られる明治開化期の人間像や新時代の文化風俗が文学作品としてどう描き出されているか、丹念に拾い出して読解することを主眼としたい。</p> <p>大局的には、こうした明治初期の新時代文学への胎動を、各受講者が自ら捉え考えていくことになるだろう。作品をしっかりと読み込んで授業に臨んでほしい。</p> <p>明治初期文学で卒業論文を執筆する学生、執筆しようと考えている学生は、特に本演習を履修するようにして下さい。</p>	
(評価方法)	
演習発表 60%、授業参加(質疑応答) 30%、レポート 10%。	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】未定
	【時限】未定
【教員名】藤川 雅恵	
【テーマ】	
(演習内容)	
(評価方法)	

【近代文学】

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ（★）	【曜日】月曜
	【時限】3限
【教員名】石川 則夫	
【テーマ】近現代文学の作品研究	
<p>（演習内容）</p> <p>4年生のみ履修可（4年次に演習Ⅱとして履修する者も含む）</p> <p>原則として石川則夫を指導教員とする卒業論文履修者（4年生）を対象とするが、今年度は6名だけなので、卒論非履修者も14名以内で履修可。前期は各自の対象作品における先行研究論文の紹介と批判検討を發表し、夏期休暇中に「先行研究史」を作成し、提出。後期は、本論の途中経過報告を發表してもらおう。卒論非履修者の場合は、第1回授業時まで作家と作品（自由選択）を決定しておくこと。</p>	
<p>（評価方法）</p> <p>前期發表を踏まえて作成する「先行研究史」。後期の卒論作成、提出を踏まえて後期末に卒論提出後の課題点をレポートとして提出してもらおう。当然であるが、本演習の評価と卒論評価は別である。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ（★）	【曜日】金曜
	【時限】6限
【教員名】井上 明芳	
【テーマ】横光利一研究	
<p>（演習内容）</p> <p>本演習では、新感覚派の旗手と言われた横光利一の文学について、その表現を中心に考察する。前期は「春は馬車に乗って」「機械」などの短編小説を取り上げる。後期は「上海」「紋章」などの中編小説を取り上げる。</p> <p>前期後期を通じてグループ發表をしてもらおう予定である。發表は原則的に先行研究を紹介し研究史を概括した上で、独自の見解を提示する。その發表内容をめぐって質疑応答を行う。近代文学史上、表現にこだわった新感覚派の文学を通して、文学の表現への深い理解を目指す。</p>	
<p>（評価方法）</p> <p>演習發表（資料内容・口頭發表の内容・姿勢等）50% レポート（前期25%後期25%）50%</p>	

【近現代文学】

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】金曜
	【時限】5限
【教員名】井上 明芳	
【テーマ】森敦研究	
<p>(演習内容)</p> <p>森敦文学を取り上げて、構造的な読みの方法を実践的に試みる。前期は「月山」を取り上げ、生成論的な視点を加えて構造的に徹底した読解を試みる。後期は「月山」と対応関係にある「鳥海山」について、構造的な考察を深める。</p> <p>前期・後期を通じてグループ発表をしてもらう予定である。発表は原則的に先行研究を紹介し、研究史を概括した上で、独自の見解を提示する。その発表内容をめぐって質疑応答を行う。これらを通じて卒業論文制作の方法を身につけることを目指す。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>演習発表(資料内容・口頭発表の内容・姿勢等)50% リポート(前期25%後期25%)50%</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】月曜
	【時限】2限
【教員名】鬼頭 七美	
【テーマ】明治文学を読む	
<p>(演習内容)</p> <p>明治文学のなかでも異彩を放つ文豪、泉鏡花を中心に取り上げる。泉鏡花の作品は、難解な言葉遣いと幾重にも入り組んだ語り口により、現実と幻想との間の境界線を揺るがす独特な世界観にその特徴がある。従って、その作品を読解することは必ずしも容易ではないが、ひとたびその魅力の一端に触れれば、その難解さがかえって強烈な魅力へと反転しうる。この授業では、難解さを魅力へと転ずるための道筋として、作品の基底にある語りの構造に注目することになるため、語り論(ナラトロジー)に関する知見は必須となる。授業では、ナラトロジーの観点に基づいて進展著しい先行研究の成果を踏まえつつ個々の作品を精読する作業を通して、文学作品に関する分析力に磨きをかけることが重視される。取り上げる作品としては、「夜行巡査」「外科室」「琵琶伝」「海城発電」「龍潭譚」「化銀杏」などの初期作品から、「化鳥」「高野聖」といったしばしば代表作に数え上げられる作品のみならず、「三尺角」「木精(三尺角拾遺)」「春昼」「春昼後刻」などといった作品群を扱い、精読作業をベースに参加者全員による発表と討議を行う。</p>	
<p>(評価方法)</p> <p>演習発表、出席、授業中の発言(回数、内容など)、期末レポートなどにより、総合的に判断する。</p>	

【科目名】日本文学演習Ⅱ・Ⅲ	【曜日】月曜
	【時限】4限
【教員名】岡崎 直也	
【テーマ】堀 辰雄の文学	
<p>(演習内容)</p> <p>堀辰雄は、非人称の客観的視点で各作中人物の深層心理を明晰に分析する「聖家族」で主語なし日本語構文の特徴を生かし、固定するはずの視点を〈婉曲表現〉の多用で各作中人物の傍らに寄り添わせつつ経験の切実さを掬い上げた。</p> <p>しかし堀は、叙述による小説の全知的な統御への不信から『美しい村』『風立ちぬ』において、小説を書く行為自体を一人称で小説に書く、いわゆる〈小説の小説〉の試みを繰り返す。主人公〈私〉の生が、同一人物である小説家〈私〉によって表現され、また逆に、その小説家〈私〉の創作行為が同一人物である主人公〈私〉によって生きられる、といった互いを問ひ直す円環を仕組み、小説家が向き合う現実と、それから創りあげようとする世界との相剋を丹念に追究したのであった。</p> <p>その後、多人物が交渉する〈ロマン〉を書くべく堀は「菜穂子」で非人称の客観的視点を再び採用するが、心理分析を排し、場面ごとに異なる作中人物に寄り添った心理や無意識の描写と、汎神論的な自然描写とによって、叙述の全知的な統御を慎重に避ける。モダニズム文学の推進者であった堀は、一方で古人の生活に学びながら王朝小説を書きつぎ、自然描写と照応する身体感覚によって〈生〉を実感する「曠野」を執筆した。主人公の女の心理は、叙述による断定とそこから幽かに逸れる内心の吐露とのあいだを揺らぐままに提示されている。</p> <p>作品ごとに発表グループを作り、本文批評・注釈・研究史・鑑賞などの整理をもとに順次発表させ、提起された問題点について教員・学生相互の活発な質疑応答を図りたい。</p>	
(評価方法)	
平常点 60% [発表・授業時小レポート・質疑応答]、単位レポート 40%	